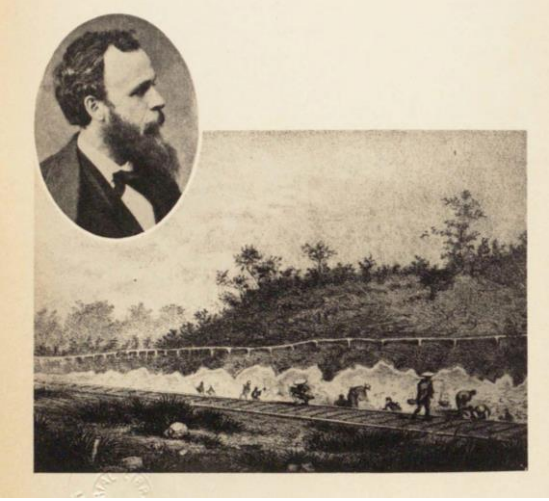
Ｎｏ．３９２【２０２０年１月３１日配信】
モースと青森（担当：児玉）

こんにちは。文化財課の児玉です。

先日、1 月 16 日に世界遺産登録を目指す『北海道・北東北の縄文遺跡群』の「推薦書」が外務省からパリのユネスコ世界遺産センターに提出されました。ユネスコの新規登録の審査は年 1 回で、審査件数の上限は 35 件となっています。審査にあたっては、世界遺産が少ない国からの推薦や自然遺産の候補が優先的に審査され、35 件の上限を超える推薦があった場合には、推薦書の提出が早い順に審査されるようです。



大森貝塚発見状況の写生画とモース
（東京府編『東京府史 行政篇 第１巻』
〈東京府　1935 年〉
国立国会図書館デジタルコレクション）

ところで、推薦書名にもなっている「縄文遺跡」という名称は、「縄文土器」が使われた時代の遺跡という意味で、「縄文土器」の名は、アメリカの動物学者であるエドワード・シルベスター・モース（Edward Morse, 1838-1925）が、明治 10 年（1877）に発掘した大森貝塚（東京都）出土の縄目文様の土器に由来します。

モースは、大森貝塚の出土品を科学的な研究の資料として扱い、明治 12 年（1879）には、その成果について、英文 “Shell Mounds of Omori” 和文「大森介墟（かいきょ）古物編」と題する報告書として出版しました。彼はその報告書の中で、縄目模様がある土器を「cord marked pottery」と名付けました。これを、白井光太郎という学者が訳した「縄紋」が定着し、後に「縄文」と書かれるようになりました。（現在でも「縄紋」と書く研究者もいます）

さて、このモースですが、彼はもともと「腕足動物」（二枚貝に似て非なる動物）の研究者で、腕足動物の種類も生息数も多い日本に標本採取のためにやってきました。

明治 11 年 7 月には北海道で、引き網で腕足動物を採集しており、8 月 17 日（土）の 10 時 30 頃に函館を三菱所属の蒸気船「青龍丸」で出発し、午後 6 時半頃に青森に到着。その夜、青森の田沢市太郎旅人宿に泊まっています。この宿は、現在の安方 2 丁目 15 番地付近とされています。

モースの日誌『日本その日その日』には、「われわれは気持ちよく海峡を越して大きな入り江へ入った。ここへ入る前に、もう一つの大きな入り江の入口を過ぎたが、その上端ではさらに陸地が見えなかった。」とあり、青森湾とその手前の平舘海峡を抜けたあたりの陸奥湾を示していたものと思われます。また、青森の町を「長くて、低くて、平べったい。」と表現しています。
なお、翌 18 日（日）には、朝 6 時頃に青森を出発し、小湊を通って七戸の福田屋善八旅人宿に宿泊。その後、五戸や三戸を通り、岩手県、宮城県、福島県、栃木県を経由して、8 月 27 日に帰京しています。

現在、縄文遺跡群の世界遺産登録に向け、ユネスコの審査に備えた準備作業に取り組んでいるところですが、「縄文」の命名に深く関わったモースが青森を訪れていることに、不思議な縁を感じます。